
お返し

あるちゅん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お返し

【Nコード】

N5596U

【作者名】

あるちゅん

【あらすじ】

少年時代の悪戯。叱ってくれる存在。その有難みは、時間をおかないとわからないのが常だ。その隙に絶望的な債務超過になってしまふ。それでも少しずつ返済しよう。ゆっくりでも、別の形になっても。通じているものは、きっと同じだから。

（前書き）

初投稿です。

折角の処女作ですのでテーマを自分の内面の大事な一面から引き出そうとして、「母親」をテーマにしてみました。

そろそろ壮年に達する今日この頃、実家に帰る度に母親は喜んでくれます。

母へ、感謝の気持ちを添えて

（こんなこと匿名でないと伝えませんねww）

幼い頃の私はいわゆる悪がきで、いろんな悪さをしたものだった。悪友にそのかされて万引きをしでかしたり、近所のお兄ちゃんと一緒に廃屋を破壊して回ったり、友達が父親からくすねたライターで道路に積んだ新聞紙に火をつけたり、用水の隅から隅まで網ですくって生態系を根絶やしにしたり、理科室の掃除用具箱を二階から放り出したり。悪事は少年時代によろずにあたり、数え上げればキリがない。

多くの悪戯、中には悪戯で済まないものもあったのだけれども、は露見し、犯行グループに私が在籍していることが白日の下に晒された。ケースによるが、多くの場合、主に被害を被った人物が私の当時の自宅に苦情・抗議に訪れるか、私の学校に連絡が行き、担任教諭から自宅に通達が入った。「お宅の子がかくかくしかじかだねえ。困ったんですよ。」「こんな悪ガキみたことない。」「もう少しなんとかありませんかねえ。」「後で聞いたり知ったことだが、このような遠回しな”有難い”批判が多数寄せられていたらしい。

しかし、勿論悪戯少年として多忙を極めた私の素行全てが大人の掌中に収まっていたはずもなく、友人を水の張られたばかりの水田に不意を衝いて追い落とし、おニユーの靴をまっ茶色に彩り、その持ち主をして常軌を逸するほどに憤慨せしめた「アディダス事件」、居残り掃除中にクラス中の机と椅子をめちゃくちゃに並べ替えながら、それでいて中身や防災頭巾は元の位置に据え置きという手の込んだ引越し作業を達成した「海外旅行作戦」（なぜか一味みんなで「かいがいりよこ〜う」と斉唱しながらことに及んだのだ。）などは、私とその一味だけが墓まで持つていく秘密なのだ。

悪戯の回顧のたびに思い起こされるのは、寄せられた苦情・抗議に対して、常に矢面に立たされながらも辛抱強く私を教育してくれた母の説教である。説教という言葉は、まさに適切である。この短

文の著者たる私の語彙には叱責という単語もある。しかしながら、あれは説教であつた、と思うのだ。決して頭ごなしに叱るでなく、理由を細々聞き出すでもない。（ここだけの話、子供の悪戯に理由などないのだ。少なくとも当時の私は息を吸うように悪戯をした。）母は、ただ肅然と、だらだら垂れ流される私の言い訳を聞き、聞き終わるとじつと私を睨み、自らの意見を言つて終わりなのだった。その態度の結果として、私は両親に信用されているという確信をもつ大人になった。どのような選択の場面においても、両親が自分を後押ししてくれるという安心があつた。自分は両親に愛されている、少なくとも自分でそう信じられることは、なんて幸せなことだろうか。もう少し若い頃はそれが重荷になつたこともあつたけれども、ようよう、そのフェイズを越えつつあるようなのだ。

キンツ

スプーンが壁に当たつて床に落ちる。米粒が壁にへばり付き、その重量に従つて僅かずスプーンを追う。少し水が少なかった。もう少し柔らかくないと食べられないんだよ、この馬鹿息子が、と怒られる。昨日は柔らかすぎる、ばばあをなめるな、と怒られ、出来合いのスープは塩辛いからと言うので、味付けから私が作つた自信作の玉子スープを投げつけられた。冷まして出してよかった。昨日は涙が出たけれど、今日は違う。そう、昔こんなことをしたんだ。

私はあの日近所に訪れた見知らぬ、妹連れの同世代の男の子と、どろろわけか家の前のドブ溝に駐車場の石を投げつけるといふ遊びを始めた。やや水分の足りていないドブの泥に石がめり込むのが、なんだか気持ち悪くて、面白かつたのを覚えている。ある弾みで、私の石が私の家の方についてしまい、窓を割ってしまった。見知らぬ男の子は、しゝらね、と言って去つていった。私も自分の家でなければそうしただろう。当然、これもまた説教の対象となつた。

スプーンを投げつけた母を見て、どろろ加減か私はあの日石を投げた自分を思い出した。あの日私に説教をした母は、もう今の母

の中にはいないのかもしれない。でもあの母は私の中には生きている。説教してくれる、この分からず屋の、きかん棒のばあめ。肅然と、決然と、それでも包み込むように。

だって私はあなたを愛しているから。

（後書き）

ちよつと暗い感じになっちゃいました。

因みに現実の母は元気です。いい年してジャニーズにお熱です。
ああもう、まったく・・・という感じです。

感想・批評・指摘お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5596u/>

お返し

2011年10月9日10時15分発行